

『人間知性研究』におけるヒュームの宗教論 —奇蹟および摂理に関する論考を中心に—

鬼頭 葉子

(和文要旨)

本稿は、デイヴィッド・ヒュームの『人間知性研究』における宗教に関する思索について考究する試みを行う。特に『人間知性研究』セクション10「奇蹟について」およびセクション11「特殊摂理と来世について」の二論考を包括的に捉え考察する。ヒュームが「奇蹟について」で論証しようとしたのは、奇蹟の不可能性や啓示宗教の否定ではなく、宗教体系を確立するために奇蹟についての証言を用いることへの批判である。またヒュームは、「特殊摂理と来世について」において、当時の「理神論 (deism)」を批判しようとした。ヒュームは、摂理や魂の不死性の教説が人々の道徳観を醸成するとは考えておらず、また人間の経験から神の存在を論証することは不可能と考えている。ヒュームにとって神は「存在」という範疇ではなく、心動かされる経験によって我々に感得されるのみである。ヒュームの宗教論は、摂理や来世の状態についての宗教的枠組みを超えて、他者への道徳や公德心の源泉について論考する理論的基盤として提唱されている。

(SUMMARY)

In this article, I examine David Hume's religious thought in *An Enquiry Concerning Human Understanding*. In particular, I consider Hume's ideas regarding religion and how they relate to morality using Section X "Of Miracles" and Section XI "Of a Particular Providence and of a Future State" in his *Enquiry*. In "Of Miracles," Hume is not attempting to demonstrate the impossibility of a miracle or a denial of revealed religion. Instead, he is offering a criticism of using testimony about miracles to establish a religious system. Hume also criticizes deism as represented in "Of a Particular Providence and of a Future State." Hume did not believe that the doctrines of providence and of the immortality of the soul create the morality of the people. He

also believed that it is impossible to demonstrate the existence of God based on human experience. For Hume, God is known not through the category of existence but through inspired experience. Hume proposed his religious argument as a theoretical basis for discussing personal morality toward others and the origins of public morality, beyond merely the religious framework of providence or “the future state.”

はじめに ヒュームの宗教論に関する研究の意義

18世紀の哲学者デイヴィッド・ヒュームは、経験論また感情主義 (sentimentalism) に立つ思想家として知られる¹。彼の主著である『人間本性論』(1739–40年)は、第一巻「知性について」第二巻「情念について」第三巻「道徳について」からなる三部作であり、特に宗教に関する直接的な言及は見取れない。しかしこれには事情があった。ヒュームは批判を恐れ、『人間本性論』から宗教に関する記述を注意深く抜いたのである。ヒューム自身は、むしろこの措置が『人間本性論』を骨抜きにってしまったと述べている²。にもかかわらず、『人間本性論』の刊行により、ヒュームは世間から無神論者とのレッテルを貼られることになる³。

その後『人間本性論』は、第一巻「知性について」を書き直し圧縮した『人間知性研究』として刊行された(1748年)。¹『人間知性研究』は単なる縮約版ではなく、ヒュームが『人間本性論』に取り入れるはずだった宗教に関する論考が含まれている。『人間知性研究』第10節「奇蹟について」および第11節「特殊摂理と来世について」の二論考である。このように慎重を期したヒュームの姿勢を踏まえても、彼が発表した宗教論について研究する重要性は高く、ヒューム哲学の理解を進めるためにも決して無視できない意義があると考えられる。また『人間知性研究』刊行以後の1750年代において、ヒ

¹ ヒュームの著作については、以下の通りに表記する。『人間知性研究』(*An Enquiry Concerning Human Understanding*, Tom L. Beauchamp (ed.) Oxford University Press, 1999)からの引用はEHUと略記し、節・部・段落の数字を表記する。『人間本性論』(*A Treatise of Human Nature*, L. A. Selby-Bigge (ed.), P. H. Nidditch (revised), Oxford University Press, 1978)からの引用は、Tと略記し、巻・部・節・段落を表記する。また幾つかの訳語・訳文については、神野慧一郎・中才敏郎訳『人間知性研究』京都大学学術出版会、2018年を参照した。

² R. Klibansky, E. C. Mossner (eds.), *New Letters of David Hume*, (Oxford University Press, 2011 (1954)), p. 2. 中才敏郎『ヒュームの人と思想 宗教と哲学の間で』、和泉書院、2016年、74-75頁。

³ 中才、2016年、75頁。

ュームは『宗教の自然史』（1757年）『自然宗教に関する対話⁴』など、宗教に関する思索に多くの労力を費やしている。

ヒュームの宗教論に関する研究状況について簡単に確認しておこう。1980年代までは、A. フルー⁵、J. C. A. ガスキン⁶らによる包括的研究が存在する。その後、1990年代終わりから2000年代にかけて、J. A. ハート⁷、P. ラッセル⁸、T. ヨーダー⁹など、ヒュームの宗教論に関する充実した研究が次々と発表されてきた。ハートの言葉を借りれば、初期に多く行われた認識論的研究は、ヒューム思想を断片的に捉えてしまう傾向があり、その全体像をとらえるためにはヒュームの哲学的論考以外にも注目することが重要である¹⁰。そのような観点から日本の研究状況を見ると、ヒュームの宗教論に関する研究はまだ不十分である¹¹。なかでも『人間知性研究』における宗教に関するセクション、すなわち第10節「奇蹟について」および第11節「特殊摂理と来世について」の二論考については、従来、奇蹟論の解明に研究の重点が置かれており、摂理に関する論考と併せて包括的に理解する試みをした研究は見当たらない¹²。

⁴ 本著作はヒュームの死後にあたる1779年、甥の手によって刊行されたが、原稿自体は1750年代から準備され、その後1760年代に二度の修正が加えられている（中才、2016年、126-127頁）。

⁵ 代表的な著作として、次を参照。Antony Flew, *Hume's Philosophy of Belief*. (Routledge and Kegan Paul, 1961)

⁶ 代表的な著作として、次を参照。J. C. A. Gaskin, *Hume's Philosophy of Religion* (2nd edition). (Humanities Press International, 1988)

⁷ Jennifer A. Herdt, *Religion and Faction in Hume's Moral Philosophy*. (Cambridge University Press, 1997)

⁸ Paul Russell, *The Riddle of Hume's Treatise: Scepticism, Naturalism and Irreligion*. (Oxford University Press, 2008)

⁹ Timothy S. Yoder, *Hume on God: Irony, Deism and Genuine Theism*. (Continuum International Publishing Group, 2008)

¹⁰ Herdt (1997), xii. 近年ではヒューム哲学の現代的意義を見出す論者も多い。特にヒューム哲学の中心的概念である「共感」について、当時の宗教的党派対立を避けるため、多様性・普遍性を持つ倫理として提唱されたとみるハートや、ヒュームの「共感」概念について、文化的多様性を確立する試みと捉えるJ. A. テイラーなどの研究がある。

¹¹ 斎藤繁雄『ヒューム哲学と神の概念』法政大学出版局、1997年、中才敏郎『ヒュームの人と思想 宗教と哲学の間で』和泉書院、2016年などがある。他に奇蹟論に注目した研究としては、中西貴裕「ヒュームの奇蹟論の研究」（『人文研究』第67巻、2016年、105-122頁）、『自然宗教に関する対話』に注目した研究としては、富田規武「デイヴィッド・ヒュームの宗教論—『自然宗教に関する対話』における宗教と道徳—」（『東海女子大学紀要』第12巻、1992年、67-77頁）および小林優子「ヒューム哲学における神の信念—デザイン論証批判と、人間本性からの信仰論」（『イギリス哲学研究』第29巻、2006年、69-85頁）などがある。

¹² 中才は『ヒュームの人と思想 宗教と哲学の間で』において、「奇蹟論は、…「特殊摂理と来世について」と関連付けて読まれる必要がある」と述べてはいるものの、奇蹟論と摂理との連

そこで本稿では、「奇蹟について」および「特殊摂理と来世について」の二論考を包括的に捉え考察する試みを行う。他にも宗教についてのヒュームの著作は、『宗教の自然史』や『自然宗教に関する対話』が存在するが、本稿では『人間知性研究』におけるヒュームの宗教に対する立場を明らかにするために、これらの論考については更なる考究の機会を待つことにしたい。はじめに「奇蹟について」で表明されたヒュームの宗教理解を把握し、次いで「特殊摂理と来世について」を扱う。さらにヒュームの時代における宗教的状况について考察した上で、ヒュームが目指したものは何であったのか、ヒュームにとって「宗教」とは何を意味したのかについて考究を進める。

1. 奇蹟に関するヒュームの理解

ヒュームの奇蹟に関する議論に入る前に、ヒュームがいう人間本性の根本にある因果推論のしくみについて押さえておく必要がある。以下『人間知性研究』の記述、必要に応じて『人間本性論』の記述を参照してみよう。

ヒュームによれば、人間の心の知覚は、力 (force) と生氣 (vivacity) の程度 (生き生きとしているかどうか) の違いによって二つに区別される (EHU 2.3)。力と生氣において劣る方の知覚は「観念 (idea)」と呼ばれ、生き生きとした知覚の方は「印象 (impression)」と呼ばれる。観念は印象の写しや再現であり、印象の摸写として記憶や想像に現われる。観念は不鮮明で不明瞭であるため、人は語 (term) に確定的な観念が付随すると想像しうるに過ぎない一方、すべての印象、すなわち感覚は力強く生き生きしたものだとされる (EHU 2.9)。

上記のような理解によると、現在において感覚器官で知覚することや、過去に経験したことの記憶以外に、何らかの实在や事実を認識することはどのようにして可能になるのだろうか。ヒュームによれば、事実に関する一切の推理は、原因と結果の関係に基づいており、この因果関係によってのみ、われわれは「記憶と感官の証拠を越えて進むことができる (EHU 4.4)」という。現前する事実と、そこから推測される事実とは、原因と結果として結びつくことによって関連性を持つからである。しかも原因と結果は、理性によってではなく経験によって発見されうる (EHU 4.7)。例えば、事実の反対、「太陽は明日昇らないだろう」という命題と、「太陽は明日昇るだろう」という命題とは、常

関については十分に議論されておらず、奇蹟論に関する記述が中心の議論となっている。

に無矛盾で可能である。また我々は、玉突きのボールが別の第二のボールに衝突すれば、運動が伝えられることを推測するが、結果は原因と全く異なっており、原因のうちに結果を発見することはできない。したがって第二のボールの運動は、第一のボールの運動とは全く異なっており、「結果をアプリアリに最初に捏造したり思い抱いたりすることも、まったく恣意的なことである (EHU 4.11)。」

上記のようなヒュームの因果推論は、「奇蹟について」および「特殊摂理と来世について」の検討を行う上でもきわめて重要であるため、まず確認しておくこととした。それでは次いで奇蹟論の内容に入っていこう。

ヒュームは「奇蹟について」の冒頭で、「広教主義者 (Latitudinarian)¹³」の一人として知られるジョン・ティロットソンの名を挙げ、彼の議論を紹介している。ティロットソンは、物質としてのパンがキリストの体へ変容するという「化体説」に反論する立場をとる¹⁴。ヒュームはティロットソンの「反化体論」を援用し、聖典 (scripture) も伝承も証言者の証言に基づいており、そのため「感官の直接の対象に対するような信」、すなわち感覚器官において知覚するような強い証拠性を生むことはないと述べる。ヒュームによれば、ティロットソンの議論は、迷信を沈黙させうるもので、ヒューム自身も同様に迷信を追放するような議論（「奇蹟について」の論考のこと）に思い至ったという。また 1741 年に刊行されたヒュームのエッセイ集『道徳・政治論集』に収録された「迷信と熱狂について」の冒頭でも、ヒュームは、自分のみが啓示を受けたと思ひ込むような宗教的熱狂 (enthusiasm) も、迷信 (superstition) と同様に宗教に対する誤った理解であるとみなし、迷信と熱狂への批判的姿勢を明らかにしている¹⁵。

ヒュームによれば、奇蹟は、「人々の証言や目撃者と観察者の報告から引き出されるような種の推理」であって、この種の推理は「人間の証言の誠実性の観察と、事実が目

¹³ 「広教主義者」とは、ケンブリッジ・プラトニストらに当初与えられた名称であったが、その後の 17 世紀後半の彼らの後継者で、自由主義的・合理主義的な人々を指す (J. R. H. ムアマン『イギリス教会史』八代崇・中村茂・佐藤哲典訳、聖公会出版、1991 年、333 頁)。ティロットソンの他にはグランヴィル、スティリングフリート、テニソンなどが挙げられる。彼らの考え方の共通点は、宗教上の教義を簡単なもの限定することによって、それ以外の教義や礼拝形式については不問に付し、幅広い統一を維持しようとする立場であった (浜林正夫『イギリス宗教史』大月書店、1987 年、181 頁)。

¹⁴ ヒューム『人間知性研究』神野慧一郎・中才敏郎訳、京都大学学術出版会、2018 年、85 頁。あるいはビーチャム版の注解参照。

¹⁵ David Hume, *Essays: Moral, Political, and Literary*, Eugene F. Miller (ed.), Liberty Fund, 1987, pp.73-74.

撃者の報告と一致することの観察」から確証を得ることがある。「しかし証人と人間の証言に由来する証拠は過去の経験に基づく（EHU 10.1.6）」ため、「何らかの特定の種類の報告と何らかの種類の対象との間の連関が恒常的であるか、変化しやすいものであるかに応じて、確証（proof）とみなされるか、あるいは蓋然性（probability）とみなされる（EHU 10.1.6）。」先に確認したヒュームの因果推論において、事実に関する理論については、経験が唯一の指針であるが、この指針は不可謬ではなく、確信の程度は「最高度の確実性（certainty）から最低度の精神的証拠（moral）（EHU 10.1.3）」に至るまでの段階がある。そのため賢明な人は自らの信念（belief）と証拠（evidence）とをつりあわせる。対立する実経験を比較し、より多くの実体験によって支持されているかどうかによって、あくまで蓋然的な判断を下すのである（EHU 10.1.4）。

またヒュームは、奇蹟とはまず「自然法則の侵犯」であると措定しつつも（EHU 10.1.12）（EHU 8.25）、奇蹟そのものの生起を否定するわけではなく、議論を展開していく。ここで問題となるのは、自然法則に反するような奇蹟があり得るかという問いではなく、奇蹟についての証言の信頼性、すなわち蓋然性ないしは確証に至るような奇蹟証言がありうるのか否かである。したがってヒュームは、奇蹟が生起する可能性について否定はしておらず、自然法則を超える奇蹟が生起し得るかについてはオープנקエストションのまま議論をすすめている。奇蹟を証言者の問題と捉えることによって、ヒュームは奇蹟のアプリオリな否定を回避するのである¹⁶。

それでは証言の信頼性という問題についてみていこう。例えば死者がよみがえるのを見たという証言をする人に対して、この人が欺いている、あるいは欺かれていることが蓋然的であるのか、死者の復活が蓋然的であるのかを熟考する。ヒュームはこのような場合、人は「二つの奇蹟」を比較考量し、いずれが優勢であるかとみるに応じて判断を下すが、「奇蹟的な方を常に拒否する」という。よってこの場合は、証言者が嘘を言っていることが、死者の復活以上に「奇蹟的」で驚きに満ちたことであるならば、「死者の復活」もありうることになる。

さらにヒュームは証言の信頼性について、その理由を四つ示す。第一は、十分な数の信用に足る人々がおり、彼らが偽証する可能性もないという状況を想定できないことが理由となる。第二に、驚きや不可思議といった要素は、人間の情念にとって快い要素で

¹⁶ Cf. 中西、2016年。

あるため、自然にそちらに向かう傾向があること、第三には、無知で未開な社会ほど超自然的で奇蹟的な物語に事欠かないという歴史的状況が挙げられている。さらに「奇蹟の権威を減少させる」第四の理由として、世界の他宗教について言及されている。「それが帰属する特定の（宗教）体系を確立する（establish）こと」が直接の目的であると限定された限りの「奇蹟」は、多元的な宗教状況においては、他のあらゆる体系を覆す同じ力をもっている（EHU 10.2.24）。人が他宗教における奇蹟を否認するとき、その否認は自らの宗教における奇蹟に対しても向けられることになるからである。

次いでヒュームはいくつかの有名な奇蹟物語の事例を挙げつつ、歴史的な事実に関する証言ですら対立することがあり得るため、証言者によって語られた奇蹟間の対立も生じ得ることを述べる（EHU 10.2.28）。ここからヒュームは、「いかなる種類の奇蹟についての証言も、蓋然性に達することはないし、まして確証に達することはない（EHU 10.2.35）。」したがって「人間の証言は、奇蹟を証明し（prove）、いかなる宗教の体系の正当な基礎となるような力を持ちえない（EHU 10.2.35）」との結論に至る。

このようなヒュームの奇蹟理解について、それを啓示と同一視する見解もみられる¹⁷。しかし啓示に関しては、ヒュームの以下のような記述がある。「われわれがこれまで奇蹟について述べてきたことは、そのまま変えずに、預言（prophecies）にも適用されるだろう。実際のところ、全ての預言は本当の奇蹟である。そしてそのようなものとしてのみ、何らかの啓示の確証としても認められうる（EHU 10.2.41）。」

筆者は、ヒュームが奇蹟論で論証しようとしたのは啓示宗教の否定ではなく、自然法則を逸脱した奇蹟についての証言を、宗教体系を確立するために支持することへの否定であると考えている。これは、以下のようにヒュームがつけた但し書きからも読み取ることができよう。「私が、奇蹟は宗教の体系の基礎となるようには決して証明（prove）されえないと言う際、ここでつけた限定に留意していただきたい（EHU 10.2.36）。」そしてそれ以外の場合であれば、「人間の証言からの確証を許すような種類の奇蹟」や、自然法則の侵犯もあり得るとヒュームは言う。本章の冒頭でも述べたように、ヒュームの目的は迷信に対する批判にあり、奇蹟によって確立されたり、確証されたりするような宗教には迷信が入り込む要素がきわめて大きい。さらに言えば、宗教体系の確証として奇蹟

¹⁷ 斎藤、1997年、103頁。

を標榜するような「宗教」に対するヒュームの批判的態度を見て取ることもできるだろう。

2. 特殊摂理と来世について

日本の研究状況では、奇蹟論への注目が高いのに対し、第 11 節への関心は低い。中才の解釈によれば、第 11 節におけるヒュームの最終目的は、宗教（信仰）が科学や常識（知性）と相容れないものであることを示すことである¹⁸。しかしこのような理解は、ヒュームの論駁対象を「宗教（信仰）」一般という漠としたものにしてしまいかねない。第 11 節も 10 節同様、特定の相手を批判する内容であるが、ヒュームがどのような対象を想定しているのかを明確にしなければ、ヒュームの宗教論についての正確な理解が難しくなるだろう。筆者の見解は、ヒュームが第 11 節で論難する対象は当時の「理神論（deism）」であるというものである。以下、筆者のこの仮説について典拠を挙げつつ、第 11 節の内容を把握していく。

第 11 節は、「懷疑論の逆説を好む友人」と「私」との対話形式をとっており、「友人」がエピクロスに扮して、「私」を「アテナイの人々」と想定し演説をするという複雑な構造となっている。この設定におけるエピクロスは、摂理や来世を否定する立場をとったため、道徳による束縛を弱め、社会の基礎を危うくした人物として非難されている。演説をはじめてまもなく、「宗教を理性の原理の上に確立しようとしている宗教的な哲学者ら（religious philosophers）」に言及される（EHU 11.10）。彼らによれば、宇宙の秩序や美が単なる偶運（chance）によって生み出され得ることはない。しかし自然において現われた知性と計画のしるしという結果を見れば、その原因を単なる偶然と捉えることは難しいため、偉大な知性や計画が存在するはずだという彼らの論法は、「結果から引き出されて原因へと至る議論」である。つまり因果推論でいうところの原因から結果の推論とは逆に、結果から原因を導き出す推論である。

演説を終えた友人に対して「私」は、いくつか反論を試みつつ、最終的には、人々は「友人」とは異なり、神の存在の信念から多くの帰結を引き出し、神は悪徳を罰し、美德ある人に報いを与えるという摂理を想定していることを指摘する。「私」によれば、

¹⁸ 中才、2016 年、105 頁。

この摂理そのものの是非はともかく、多くの人がそれに影響されて節度ある生活を行っていることは否定できないという (EHU 11.28)。

この第 11 節では、そもそもヒュームが誰の立場をとっているのかが議論の対象となっている¹⁹。ヨーダーは、従来「懐疑論の逆説を好む友人」をヒューム本人ととる解釈がなされがちだったが、むしろ「私」と「友人」の対話全体をヒュームの考えととるべきだと主張する²⁰。筆者も、ヒュームは第 11 節全体で、「私」による「疑問」を挿入しながら、自らの考えを述べたものだと理解する。というのも対話形式を取ることで、摂理の否定につながりうる議論から、ヒュームが注意深く距離をとることができると同時に、主張に対する反論をも盛り込むことで内容をより生き生きした説得力あるものにすることができるからである。ヒュームは当時普及していた宗教状況を意識し、一方では摂理を、もう一方では理神論的な神認識を取り上げつつ、どちらにも疑問を付すことで議論を深めようとしていると思われる。

それでは、ヒュームが第 11 節全体を通じて批判しようとした相手は、本当に理神論者だったのだろうか。筆者の見解を先取りしておくとして、ヒュームがいう「宗教を理性に近づけることができるか探究しようとしている宗教的な哲学者ら」が、17 世紀～18 世紀に隆盛したイギリスの理神論を指しているとしても矛盾はないと思われる²¹。

D. A. ペイリンによれば、当時の人々にとって「理神論」という語は蔑称として用いられた。「理神論者」のレッテルを貼られた人々は、批判者たちから、理性の規範をあまりに極端に適用しており信仰心が足りない、とみなされていた²²。サミュエル・クラ

¹⁹ Yoder, 2008, pp. 115-116.

²⁰ Yoder, 2008, p. 16.

²¹ 「理神論」の語そのものは、多くの研究者が指摘するように、概念内容や対象範囲が曖昧であり、きわめて定義が困難である (Wayne Hudson, *The English Deists* (New York, NY: Routledge, 2009), pp.1-28. ギリー、シールズ編『イギリス宗教史 前ローマ時代から現代まで』指昭博他訳、法政大学出版局、2014 年、273 頁。芦名定道『自然神学再考』晃洋書房、2007 年、121 頁、137 頁)。たとえばハドソンは、従来の研究で理神論とは「神が世界に介入しないことを想定する」と理解されてきたが、実際にはその範囲のみにおさまるような「理神論」を見出すことはできないと指摘する (Hudson, 2009, p.29)。しかし、ヒュームと「理神論」との関係を確認することは無意味ではないと筆者は考える。当時の人々の間では「理神論」と呼ばれるものが存在しており、当時の人々は、不正確であるものの一定程度それを定義づけていた。また、ヒューム自身も「理神論者」というレッテルを貼られたことも確かである。以下の論考では、18 世紀当時の理神論理解を考慮しつつ、ヒュームの立ち位置について解明することとしたい。

²² D. A. ペイリン「第 11 章 イングランドでの理性的宗教」(『イギリス宗教史 前ローマ時代から現代まで』所収、法政大学出版局、2014 年、274 頁)。

ークは、1705年のボイル・レクチャーで「理神論者」を次のように定義している²³。クラークによれば、「理神論者」は以下四つの区分に分類され、四番目のカテゴリのみが「真の理神論者」にあたとされる²⁴。一) 神自身は「世界の統治には関わらない」と考える者。二) 「神の存在 (Being)」と「神の摂理」は認めるが、「神は人間の活動の道徳的な善悪には関知しない」と考える者。三) 神に帰されるべき事柄と神の全てを統治する摂理を正しく感知し、神の道徳的な完全さを認めるが、人間の霊魂の不滅という考えを疑問視する者。四) 「神についての正しい考え」をもっているが、あらゆる啓示を否定し、「自然の光によって明らかにされたことのみ」を信じる者。

クラークの分類に従えば、ヒューム自身も一)～三)の分類に当てはまる「理神論者」ということになるが、「真の理神論者」ではないと考えられる。一)と二)の分類に関して言えば、摂理を否定し、人間の道徳的行為と神は無関係と見る点で、それは確かにヒューム自身の立場に共通する内容となる。ヒュームはエピクロスの口を借りて、聴衆に対して次のように述べているからである。「君たちが言うには、私は摂理を否定し、世界の至高の統治者を否定する。その統治者は、できごとの行く末を導き、人々が企図するすべてのことについて、悪徳者を汚名と失望で罰し、有徳者を名誉と成功で報いる [と言われる]。(EHU 11.20)。」ヒュームの経験論、また感情主義の立場を考慮すれば、「物事の現在の情景 (EHU 11.21)」こそが考察の唯一の対象とみなされるべきであり、経験し得ない将来の状態 (来世) から神の摂理を推論することは不可能である。この点からも、ヒュームは摂理そのものを否定しているといつてよい。

三)の分類については、本稿で詳しく扱うことは紙幅を超えるが、ヒュームはエッセイ「魂の不死性について」の中で、一般的に流布している魂の不死性という教義について疑義を呈しており、また『人間本性論』では「旅行家や歴史家の証言から引き出されるような、真実で確立された判断をもって、魂の不死を信じる者は数少ない (T1.3.9.14)」

²³ ヒューム自身がクラークの説をどこまで採用したかどうかを確かめることは難しいが、クラークの説が当時の定評ある学識として流布していたことは間違いのないため、本説を参照することには十分意義がある。Hudson, 2009, p.81. ペイリン「イングランドでの理性的宗教」『イギリス宗教史 前ローマ時代から現代まで』273頁。

²⁴ Samuel Clarke, *A Discourse Concerning the Being and Attributes of God: The Obligations of Natural Religion, and the Truth and Certainty of the Christian Revelation*, printed by W. Botham, for James and John Knapton, 1728, pp. 157-168.

とも主張している。そのわけは、我々の行動が、「将来の状態」ではなく、今現在の快や苦痛、報酬や罰を念頭に置いて導かれているという事実があるためである (T1.3.9.14)。

それではヒュームが四) の分類「真の理神論者」にあたるかと言えば、これには当てはまらない²⁵。ヒューム自身は「自然の光」すなわち理性によってのみ神についての知識を得られるという解釈をとらないからだ。第11節の中にも以下の記述がある。「われわれが自然の行程から論じ、最初に宇宙の秩序を与え、なおその秩序を維持しているある特定の知性的な原因を推論する」ことは不確実である。それは人間の経験の範囲を越えているからである (EHU 11.23)。したがってヒュームにとっては、宇宙の存在または秩序の作者としての神が想定されるとしたら、神は「その作品に現れている、まさにその程度の力能、知性、慈愛をもっている (傍点筆者) (EHU 11.14)」に過ぎないことになる。したがってヒュームはクラークのいうところの「真の理神論者」ではなく、摂理や魂の不死性について、理性による推論や、実際に経験できるかのように考えて振る舞うことを糾弾していると考えられるのである。神格 (Deity) は人間に経験される、さまざまな事物の属性や性質からの類比から推論されるもののうちにとどまるものではない (EHU 11.27)。

3. ヒュームの宗教論の形成背景

3-1 理神論と宗教的状况

ここまで本稿では、「奇蹟について」「特殊摂理と来世について」におけるヒュームの立場は、迷信と熱狂に対する批判および理神論に対する批判であると捉えて考察してきた。この筆者の説は、ヒュームの時代における宗教史的状况について把握することにより裏付けられる²⁶。ヒュームが『人間知性研究』を執筆した当時、生活の拠点としていたイングランドでは国教会と非国教徒 (Dissenters) との対立があり、国教会内部でもハイチャーチ派とロウチャーチ派が争っていた²⁷。またクエーカー、レヴェラーズ、信仰

²⁵ ガスキンによれば、ヒュームの神観は「希薄な理神論者 (attenuated deist)」と捉えられている (Gaskin, 1988, pp.6-7)。他方ヨルダーのように、ヒュームを理神論者と捉えない見解もある (Yoder, 2008, pp.15-20)。筆者自身は、ヒュームは理神論と共通する要素を持ちつつも、理神論に対して批判的であると解釈する。

²⁶ 近年の海外のヒューム研究では、ヒューム思想の宗教史的背景の重要性が指摘されている (ハート、ヨルダーら)。なかでもハートの研究では、宗教的な党派 (faction) の状況から、ヒュームの道徳哲学の形成へと至る思想的背景が論じられている。

²⁷ ムアマン、1991年。

復興運動としてのメソヂストなど、ある種の熱狂を含む宗教運動もあった²⁸。これに対し、合理的かつ自由主義的な広教主義者 (Latitudinarians) や、自由思想家 (free-thinkers)、ユニテリアンの立場で知られるソツツィーニ派など、多様な党派も林立していた²⁹。これらの宗教的な対立や抗争を加速するように、18 世紀のイングランドは政治的にも混乱していた。1714 年にホイッグ党が政権の座に着くと、トーリー内閣がハイチャーチ派擁護のために制定した「仮装信徒禁止法」と「分派活動禁止法」を廃棄した³⁰。一方、ヒュームの生まれ故郷であるスコットランドでは、1690 年に長老主義教会が国教会に制定されたが、その後も啓蒙主義をめぐる教会内部での論争、ジャコバイトの反乱などが続き、ヒューム自身もこれらに巻き込まれていった³¹。18 世紀の英国における宗教状況は、理性に対する信頼と宗教的熱狂が混在していたとも言える。

さて理神論は、熱狂に対して反対の立場をとった。イギリス理神論 (English Deism) についての研究で知られる W. ハドソンは、英国 (イングランド人でない論者も含まれる) の理神論者として、チャーベリーのハーバート卿、チャールズ・ブrouント、ジョン・トーランド、アンソニー・コリンズ、マシュー・ティンダル、ピーター・アネットなどを挙げている³²。特にチャーベリーのハーバート卿による一連の著作は、信条・儀式・司祭制度に妨げられない自然宗教への関心と呼び起こし、理神論の起源ともみなされている³³。イギリス理神論は、それぞれの党派において教義や典礼などの点で相容れなくとも、理性という共通項で神について説明しようとする試みであり、当時の宗教状況および自然科学の発展という時代状況から生まれたと言ってよいだろう。

ペイリンは、理神論 (理性的宗教) とは、信仰の最終的権威を理性に求めるようになった流れとみる。人々が理性に訴えるようになった背景としては、一) 宗教的熱狂や偏

²⁸ ウォードはこれらの運動の中に、理性を軽視し情熱を追求する傾向、信仰の違いによる反乱勃発の可能性、一種の敬虔主義などを確認する。W. R. ウォード「18 世紀イギリスにおける福音主義の復活」313-338 頁 (『イギリス宗教史 前ローマ時代から現代まで』所収)。

²⁹ ムアマン、1991 年、318-353 頁。ここに挙げた各宗教運動の詳細は、ムアマン (1991 年)、ギリー他 (2014 年)、リヴィングストン編『オックスフォード・キリスト教辞典』木寺廉太他訳、教文館等を参照。

³⁰ ムアマン、1991 年、365 頁。

³¹ ヒュームは、1745 年のジャコバイト蜂起におけるエディンバラ占領について、友人であった当時の市長を擁護する論陣を張っている (中才、2016 年、15 頁)。また、ヒュームの破門宣告が可決されかけたこともあった (『イギリス宗教史 前ローマ時代から現代まで』183 頁)。

³² Hudson, 2009, p. 2.

³³ ムアマン、1991 年、359 頁。

狭な考えを統制しなければならないという考えが浸透してきたため、二) 懐疑論と無信仰からの挑戦に対抗する必要性などが挙げられている³⁴。

しかし理性による信仰の理解と、理神論とを同一視することはできない。ジョン・ロックによる『キリスト教の合理性』は、キリスト教信仰を理性・単純性・道徳性という三つの要素へと読み解いたことで知られる³⁵。ロックは事物を「理性に従うもの」「理性に反するもの」「理性を超えるもの」と措定しており、「神の存在 (Existence) は理性に従い、一つ以上の神は理性に反し、死者の復活は理性を超えている³⁶」という。芦名定道はロックと「理神論者の典型」とされるジョン・トーランドの比較を試みているが、トーランドは啓示の内容も理性の範囲内にとどまるものとみなし、「理性を超えるもの」を認めない³⁷。

先述したように、ヒュームにとって理性によつてのみ信仰の真理が得られる「真の理神論」は批判すべき対象であつて、トーランドの見解はヒュームから見れば受け入れがたい。熱狂にも理神論にも与しないのがヒュームの立場なのである。

3-2 ヒュームにとって「宗教」とは何であるのか？

第1項と第2項において筆者は、ヒュームが『人間知性研究』において、宗教批判の体を取りつつ、「宗教」が何ではないのかを語っていることを明らかにした。ではヒュームは、「宗教」とは何であると語っていたのだろうか。『道徳・政治論集』においてヒュームは、迷信と熱狂は「本物の宗教の腐敗・墮落」と述べている³⁸。つまりヒュームは、当時の実定宗教としてのキリスト教や、理神論とも異なる「本物の宗教 (true religion)」を想定していたことがわかる³⁹。ヨーダーもまた、ヒュームの宗教への関心は、

³⁴ 『イギリス宗教史』262-263頁。ペイリンはここに挙げた二項の他に「16世紀の宗教戦争が、事柄を決する際に伝統的な権威に依拠していた確信を揺るがせたため」という理由も挙げている。

³⁵ ムアマン、1991年、335頁。

³⁶ John Locke, *An Essay Concerning Human Understanding* (The Clarendon Edition of the Works of John Locke) Peter H. Nidditch (ed.), 1979 [1690], p.687. 芦名、2007年、121-122頁。

³⁷ 芦名定道、2007年、123-124頁。John Toland, *Christianity not Mysterious. A Letter in Answer to Christianity not Mysterious*, with a New Introduction by John Valdimir Price, Routledge/Thoemmes Press, 1995, p.6

³⁸ David Hume, *Essays: Moral, Political, and Literary*, Eugene F. Miller (ed.), Liberty Fund, 1987, p.73

³⁹ 「本物の宗教 (true religion)」についてヒュームは、『人間知性研究』の約10年後に刊行された『宗教の自然史』においてさらに議論を展開している。本稿は『人間知性研究』におけるヒュームの宗教論を明らかにすることが目的であることと、紙幅の関係上、「本物の宗教」につい

宗教の有害な影響を批判することにあっただけでなく、宗教において真実で正しいことを識別することにも関心を寄せていたことを指摘している⁴⁰。

ヒュームが奇蹟や摂理について、一貫して経験主義の立場から捉えていたことは先に述べたが、それでは「経験できる事柄」としての宗教をいかに語りうるだろうか。ヒュームは、奇蹟論の終盤となる第 40 節でこう述べている。自身の思考は「キリスト教を人間の理性の原理によって擁護しようと努めている、キリスト教にとっての危険な友人や変装した敵を打ち破る」ものである。というのも「われわれの最も聖なる宗教は信仰に基づいており、理性に基づいていない (EHU 10.2.40)」からである。

さらにヒュームは、モーセ五書を引き合いに、聖書に語られている奇蹟について説明している (EHU 10.2.40)。ここで持ち出されるのが、いかなる証言も、もしその証言の虚偽であることが、それが確立しようとしている事実以上に奇蹟的であると言えるような種類のものでないならば、奇蹟を確立するのは十分ではないというロジックである (本稿第一章で述べた、「死者の復活」についての証言のロジック)。ここでは、奇蹟によって確立されるような「宗教」ではなく、心を動かされる宗教上の経験について述べられている。すなわち聖書の記述が虚偽であることが、そこに語られている奇蹟以上に奇蹟的であると言えるほど、聖書自体が「奇蹟的なもの (奇蹟のように心驚かされ、動かされるもの)」であることをヒュームは言う。「この書物を読むと、われわれはそれが不思議さと奇蹟で満ちているのを見出す。それは現在とは全く異なる世界の状態や人間本性についての説明を与えている (EHU 10.2.40)。」

このような奇蹟理解は、最後の第 41 節からも明らかである。「キリスト教は最初から奇蹟を伴っていただけではなく、今日においても、奇蹟なくして合理的な人によって信じられることはありえない。単なる理性はキリスト教の真実性 (veracity) をわれわれに確信させるには、不十分である。というのは、誰であれ信仰によって動かされて、それに同意する者は、自分自身の人格において絶えざる奇蹟を意識していることになる。それは彼の知性の原理のすべてを覆し、習慣と経験に最も反することを信じようとする決断を彼に与える (EHU 10.1.41)。」

ヒュームの奇蹟論に関する研究では、「宗教的奇蹟の証言は宗教体系を確立し得るか

ての議論はこれ以上扱うことができない。

⁴⁰ Yoder, 2008, Ch.5

どうか」といった問いの分析に集中するものもあるが⁴¹、ヒュームは端的に「奇蹟」が「宗教体系を確立」したり、宗教が奇蹟によって権威づけたりするようなことを批判するのである。しかしヒュームは同時にすでに心を動かされる経験として生じている「信仰としての奇蹟」こそが真の「奇蹟」であるという。ここにヒュームの奇蹟理解の本質がある。すなわち人間は神について完全に不可知なのではなく、神の「はたらき」の一部を自身が「驚き」をもって経験する限りにおいて、感得しうるという理解である⁴²。

4. まとめ ヒュームの宗教論と道徳との関わり

それでは、ヒュームの宗教的立場についてどのようにまとめられるだろうか。まずヒュームは無神論者ではない。また「理神論者」という当時のレッテルも正しいとはいえない。さらに単純な有神論者でもなく、いくつかの限定をつけることが必要となるだろう。ヒュームの宗教論について、ガスキンは「希薄な理神論 (attenuated deism)」⁴³と、ヨルダーは「無道徳的有神論 (amoral theism)」⁴⁴と、またラッセルは「非宗教 (irreligion)」⁴⁵とそれぞれ位置づけている。ただどれもがヒュームの宗教論をその思想の全体像から捉えた研究であり、『人間知性研究』に限定して論じた本稿においてこれらを論評することは適切ではない。しかし、『人間知性研究』の記述を追っていけば、ヒュームは撰理や魂の不死性の教説が人々の道徳観を醸成するとは考えておらず、また人間の経験から神の存在を論証することは不可能と考えていることがわかる。ヒュームにとって神とはその存在を論証する対象ではない。神は「存在」という「範疇」として理解されるのではなく、神の「はたらき」の結果生じる「心動かされる経験」として我々に感得されるのみである。

一方当時、無神論の立場や、撰理の教説を否定する立場に対して、人々の道徳や公德

⁴¹ 中西、2016年。

⁴² 『人間知性研究』の訳者である神野と中才は、41節の訳注として、ケンプ・スミスによる1947年の論考を引いて以下のような解説を付している。「信仰そのものが奇蹟であるということは単なるヒュームの皮肉ではなくて、カルヴィニズムの教えでもある。」筆者は、41節がヒュームの皮肉ではないという点には賛同するが、ヒュームがこの箇所でカルヴィニズムに対する護教論的な態度を示しているとは捉えない。『人間知性研究』においてヒュームは、理神論にも宗教的党派にも与しておらず、奇蹟理解において重要となる41節においてのみカルヴィニズム的結論を導き出した、と解することは不自然と思われるからである。

⁴³ Gaskin, 1988, p. 223.

⁴⁴ Yoder, 2008, p. 43.

⁴⁵ Paul Russell, *The Riddle of Hume's Treatise*. (Oxford University Press, 2008), pp. 267-278.

心が失われることが危惧されていた。ボイル・レクチャーの講師をつとめたリチャード・ベントリーは、無神論がイギリス中に行き渡ったら、友情や名誉、忠誠といったあらゆる道徳と決別することになるだろうと述べ、無神論への警鐘を鳴らしている⁴⁶。ヒュームの同時代人ハチソンもまた、人間の道徳的な行いが摂理と密接に関連していることを前提とし、人間が慈悲深い神の意匠に頼るのでなければ道徳的行為が不可能であることを指摘している⁴⁷。たしかにヒュームの言う「宗教」においては、摂理が道徳的な規制になることは想定されていない。しかしヒュームは、他者への道徳や公共の形成過程について、摂理を持ち出さずに論じている。それこそ、『人間本性論』で主要なテーマとなった「共感 (sympathy)」や「仁愛 (benevolence)」といった概念であろう。すなわち「共感」や「仁愛」とは、ヒュームが、将来を約束する摂理の代わりに、今現在において経験可能な感情に基づく道徳（すなわち、当時の有神論的神も理神論的神も必要としない道徳）のあり方について追究し体系づけようとした概念ではないだろうか。

このようにヒュームの宗教論は、迷信と熱狂でもなく、理神論のような理性偏重でもないあり方を追究したものであり、さらに摂理や来世の状態についての宗教的枠組みを超えて、他者への道徳や公德心の源泉について論考する理論的基盤として提唱されていると考えられる。

ここまで論考を進めてきて、さらなる課題が見えてきた。「共感」や「仁愛」を基盤とした道徳には、「共感できない相手に対する道徳」は生まれにくい。ヒュームのいう「真の宗教」には「共感できない相手に対する道徳」を生み出す可能性があるのだろうか。「共感」や「仁愛」と宗教の関わりについては、宗教と倫理との関係をめぐる現代の研究課題として、意義ある内容を有していることが予想される。

付記： 本研究は、科学研究費補助金・基盤研究（C）（課題番号 17K02199）による研究成果の一部である。

⁴⁶ Richard Bentley, collected by Alexander Dyce, *Sermons Preached at Boyle's Lecture; Remarks upon a Discourse of Free-Thinking; Proposals for an Edition of the Greek Testament; etc. etc.* F. Macpherson, 1838, p. 25.

⁴⁷ Herdt, 1997, p.56.

キーワード：

デイヴィッド・ヒューム、『人間知性研究』、宗教、奇蹟、摂理、理神論

Keywords:

David Hume, *An Enquiry Concerning Human Understanding*, religion, miracles, providence, deism

